

百寿者の well-being に関する質的研究

安村 和子

望ましい高齢期については、サクセスフル・エイジングという言葉で議論されてきた。サクセスフル・エイジング研究においては、幸福感の維持は重要とされており、あらゆる変数と幸福感との関連が検証されている。ただし、従来用いられてきた幸福感の概念は、成人期一般に適応できるものとして構築されてきた。

その一方で、近年、超高齢期には特有の心の発達が起こることが指摘されており、若い世代とは異なる価値観のうえに超高齢者の幸福感が定義されている可能性がある。しかし、超高齢者を対象とした調査はこれまでに数少なく、超高齢者の感じる幸福感について検証した先行研究はほとんどない。

そこで本研究では、心身の両面で超高齢期を代表する百寿者を対象として、幸福感をどのような概念として捉えているのかを調べた。本研究では、主観的幸福感に関連するいくつかの尺度を用いた口頭での質問紙調査および Ryff(1989)に則った心理的 well-being に関する半構造化面接を行い、百寿者が日常に感じている気持ちや態度を述べた発言や、百寿者の人生に対する考え方についての語りを得た。

結果として、兵庫県内の3地域に在住の99歳から105歳までの百寿者13名(女性12名、男性1名)の語りを、グラウンデッド・セオリーに基づいて分析した。そして百寿者の語りからは、「前向きな気持ちで生きること」「他者との良い関係性」「人生の充足感」「あるがままを受け入れること」「制限のなかで生きること」という5つのカテゴリーが抽出された。

これらの各カテゴリーに見られた内容から、百寿者は平穏な気分状態や人生に対する満足感を語っており、従来の主観的幸福感研究における知見と対応する結果が得られたといえる。また、心理的 well-being の各側面については、「積極的な他者関係」「人生における目的」についてはそれぞれ対応するカテゴリーが抽出され、超高齢期においてもそれらが幸福感の重要な構成要素であると考えられた。「環境制御力」「人格的成長」については、百寿者があるがままの環境を受け入れて、自己や周囲の環境を変える意欲を持ち合わせていないと語られたことから、必ずしも百寿者の幸福感に影響する要素とは言えなかった。また、「自己受容」と「自律性」に関しては、関連するカテゴリーは抽出されず、本研究においては百寿者の幸福感に関して取り上げるべきテーマとはならなかった。

また今回得られた結果から、超高齢期の幸福感を捉えるうえで、以下の二点が今後より重視されるべき点であると示唆された。第一に、百寿者は意欲・関心の低下や身体の不自由さを語る一方で、日常活動に見出している楽しみについて語った。百寿者の幸福は制限の多い生活の中に見いだされるものであったといえる。こうしたことから、超高齢期の幸福は、喪失状態の中からポジティブな感情を生み出す適応的な姿勢として捉えられると考えられた。第二に、百寿者は失うことを回避しない生き方を否定的には語らなかった。置かれた環境に受容的であることが、喪失の多い超高齢期においては幸福感を構成する重要な側面となっていたと考えられた。

本研究においては、対象者の発話量の少なさを考慮した分析を行うこと、ライフコースの視点から百寿者に特有の幸福感の側面が生じるプロセスを調べることなど、調査方法に関する限界と展望が残された。こうした課題はあるものの、本研究において示された百寿者の語りによって、超高齢期の心の状態の一端を示すことができた。超高齢者を対象とした質的研究のさらなる蓄積によって、超高齢者への理解を深めることが望まれる。それによって、従来のサクセスフル・エイジング理論を批判的に見直し、超高齢期を生きることのポジティブな側面に目を向けることや、より良い超高齢者支援につながると期待できる。(臨床死生学・老年行動学)